

進学志望動機に関する検討 —保育・幼児教育専攻学生を中心として—

長谷部比呂美

(2007年10月31日受理)

要 約

本研究では、保育・幼児教育専攻学生の進学志望動機の認知構造を明らかにし、他専攻学生との比較検討を試みることを目的とした。短期大学および専門学校の在学学生712名(保育専攻群341名・他専攻群371名)を対象として、進学志望動機についての質問紙調査を実施し、まず、21の質問項目についての項目分析を行った。その結果、資格志向や専門的知識・技術の習得への志向の強さが際だった特徴であることが明らかとなった。次に因子分析により、4因子(「肩書・経済価値」「教養」「無目的・享楽」「資質能力伸長」)が抽出された。それらの各下位尺度得点平均値を算出したところ、先行研究により指摘された享楽志向等の望ましくない動機の高さは認められず、「教養」および「資質能力伸長」得点が高く、積極的動機の強さが示されたことから、進学時の志望動機の健全さが伺われた。さらに、保育専攻群と他専攻群とを比較した結果、すべての下位尺度について有意差がみられ、保育専攻群は「資質能力伸長」得点が高く、「教養」「肩書・経済価値」「無目的・享楽」の各得点は他専攻群よりも低いことが明らかとなった。得意とする保育分野における自らの力を伸ばすことを明確な進学目的とし、広く教養を身につけるための勉学や収入・肩書き等への志向が低いことが、保育専攻群の特徴であることが伺われた。今後の課題として、進路の選択決定過程を考慮に入れた調査による、より詳細なデータについての分析検討の必要性が示唆された。

キーワード 進学志望動機、高等教育機関への進学率、大衆化、進路選択過程、保育者育成

問題の所在と目的

少子化の進行により、大学進学志願者の全員が入学定員の枠内に収まるという大学全入時代となった。大学等の高等教育機関への進学率は、毎年実施されている文部科学省『学校基本調査』によって報告されている。2006年度の大学・短期大学への進学率は49.3% (男子48.1%, 女子50.6%)^{注1)} であり、高卒女子については3年間連続して

過半数が高等教育機関に進学していることが示されている。さらに、今年(2007年)度の調査結果速報によれば、進学率53.7%で、過去最高と報告されている^{注2)}。このような進学率の上昇は、一つには、教育機会の均等化が進んでいること、高等教育制度の発展を示している。しかし一方で、高等教育の機会の拡がりによる進学者の質的な変容が危惧され、高等教育現場におけるさまざまな問題状況につながっていることが指摘されてきた。すでに、1980年代、スチューデント・アパシー(笠原,1984¹⁾;1988²⁾)・中退・長期留年等の問題や、大学のレジャーランド化がいわれていた。'90年代前半には、学内施設として実際にレジャーランドを設け、学生に無料で開放した短大のルポルタージュ(産経新聞社会部,1992, p.31-33)³⁾ さえある。'90年代後半には、私語の問題から講義における「座席指定」を余儀なくされた大学の事例(毎日新聞教育取材班,1998, p.51-52)⁴⁾ 等、学生の生の姿を取材したルポ等に高等教育の現状が報じられている。大学審議会の答申(1998)⁵⁾ でも、「高等教育における現状の問題点」として「大衆化」による多くの問題が指摘されている。それらは、高等教育が少数者を対象とした時代には想像もできなかったような問題状況である。

高等教育の量的な拡大がその質的変容をもたらしたことについては、M.トロウ(天野・喜多村訳,1976)⁶⁾ が詳細に検討している。「限定された少数者を対象とするエリート高等教育から、相対的多数者を対象とするマス高等教育への移行」、さらに「ユニバーサル高等教育」への移行が、高等教育に関する「アメリカにもヨーロッパにも共通した危機」として指摘されている(p.3-4)。高等教育制度の発展段階としての、エリート・マス・ユニバーサルの3段階は、その規模(進学率)によって区分されている。エリート段階は当該年齢層のおよそ15%を収容するところまで、次に50%までをマス段階、50%以上をユニバーサル段階としている。それら3つの段階によって「高等教育への進学機会に対する態度」についても違いがみられるとして、「進学の機会が極度に制約されている段階では、社会的出自や才能、あるいはその双方にもとづいた“特権”とみなされ」、「進学率が15%をこす」と「進学を“権利”であると考えるように」なり、「さらに進学率が50%に近づくと、「進学は一種の“義務”とみなされるようになる」と説明されている(p.63-64)。⁷⁾

日本の高等教育制度について、この区分からみると、前述したとおり、大学等への進学率が50%を越えた現在、ユニバーサル段階への移行が始まっているといえる。いっそう「大衆化」の進行しているわが国の高等教育の現状を考える時、入学者がどのような進学に対する態度・目的意識(進学志望動機)で高等教育機関への進学を選択しているのか、改めて検討してみる必要があるだろう。本研究では、現在ユニバーサル段階にある高等教育への進学志望動機に着目し、その認知構造を明らかにすることを試みたい。進学率からみて、進学機会に対して「一種の“義務”とみなされるようになる」というユニバーサル段階に入った今、進学志望動機の構造に望ましくない特徴がみられるのか。マス高等教育の段階にあった1980年代・'90年代、進路選択や進学目的に関する意識を明らかにするための研究として、進学志望動機に関する多くの先行研究

がなされてきた。(下山,1982⁷⁾, 1983⁸⁾, 1984⁹⁾; 渕上,1984¹⁰⁾; 宮本,1991¹¹⁾; 古市,1993¹²⁾; 斎藤,1996¹³⁾; 八木ら,2000¹⁴⁾)。本研究では、とくに、高等教育の対象者のうち、保育・幼児教育専攻(以下、保育専攻と記す)学生の進学に対する態度・目的意識について、他専攻の学生との比較検討を試みる。保育者養成という教育目的が特化された課程であり、入学者の進学目的意識も明確であるはずの養成機関においても、大学審議会答申(1998)¹⁵⁾により指摘されたような、様々な問題の程度も頻度も目立つようになってきているのが現状であり、進学志望動機についてあらためて詳細に検討してみる必要があると考えられるからである。養成課程のカリキュラムに真摯に取り組み、各教科科目の学習においても実践現場における実習においても、豊かな学びの経験を重ね、保育者となるために着実に力を身につけていく者も多く在学する一方で、どのような目的をもって進学してきたのか、目に余る受講態度や目的意識の乏しい学生も散見されるようになってきている。授業への遅刻・欠席、講義中の私語、化粧、携帯メール、手洗い等を言い訳とした授業の中抜け、レポートや必要書類の提出期限を守らない、単位さえ取ればよいといったおざなりの取り組み等。また、アルバイト中心の生活が翌日の授業中の居眠りにつながっている学生もみられる。保育・教育実習の受け入れ先から、取り組みの不十分さに厳しい指摘を受け、少数ではあるが、「何を学ぼうとして実習に来ているのか疑問である」「保育者としての適格性に欠ける」といった評価さえ受ける学生もみられるようになった。

大学のレジャーランド化がいわれた当時、古市(1993)¹⁶⁾は、大学生を対象とした大学進学動機を明らかにするための調査を実施し、その特徴と学部による差異を明らかにする試みをしている。その結果、明確な進学目的をもたず、学生生活をエンジョイするためといった「享楽志向」の進学動機が、各学部をこえた傾向として強いことが報告されている。「享楽志向」の他に「無目的、同調」「勉学志向」「資格、就職志向」の各因子が見いだされており、学部間での比較検討がなされているが、そこに保育者養成のための学部は含まれていない。また、進学志望動機に関する先行研究のうち、渕上(1984)¹⁷⁾と八木ら(2000)¹⁸⁾の研究は、高校生を対象とした調査を実施している。渕上(1984)は、志望動機の構成要因として、「大学の本来的功能」「家族への配慮と規範機能」「モラトリアム機能」「大学の副次的機能」「大学の経済価値機能」の5因子を見いだしている。八木ら(2000)の研究では、「社会的地位」「得意分野」「無目的・漠然」「エンジョイ」「専門・資格」の5因子が抽出されている。しかし、保育専攻の学生を対象とした進学目的・志望動機についての調査研究はあまりみられず、長谷部(2004)¹⁹⁾; 2006²⁰⁾が検討を試みているものの、保育者養成機関の校種のうち専門学校1校のみを対象とした極めて限定的なデータであり、保育専攻以外の志望動機との比較検討もなされていない。そこで、本研究では、専門学校の他に短期大学の在学学生も調査対象として加え、進学志望動機の構造を明らかにし、保育専攻学生の志望動機について他専攻の学生との比較検討を試みる。それらを、保育者養成上の課題を検討するために資する基礎的資料として収集したい。

方法

1. 調査対象

首都圏にある2年制短期大学および2年制保育専門学校²⁾の2003年度～2006年度の在
学生。女子のみ、計736名。うち有効回答数、712。

調査対象校はいずれも、各学科・コースの課程において資格（任用資格を含む）・
免許が取得できるようにカリキュラムが組まれ、卒業後はそれぞれの資格・免許をい
かして栄養士・介護福祉士・保育士・幼稚園教諭等の専門職に就く学生が多い。

保育専攻の群とそれ以外の学科・コース（社会福祉・介護・栄養）専攻の群（以下、
他専攻群と表記する）の内訳を以下に示す。

保育専攻群	341
他専攻群	371
計	712

調査時期 2003年～2006年の4～5月

調査方法 質問紙調査法。集団法による。教室単位で、講義時間の一部を用いて担
当教員により調査票を配布し、調査終了後に回収した。

2. 調査内容と質問項目

調査内容

進学志望動機に関する21項目について質問紙調査を実施した。

分析には、統計パッケージSPSS11.0Jを用いた。

質問項目

先行研究、八木ほか（2000）²⁾の進学志望動機に関する項目と同一の21項目を用い
た。これらの項目に対して、次のような質問を行った。「あなたが在学している学科
（コース）への進学を選択したのはなぜですか。以下の各項目それぞれについて、あ
てはまる数字に○をつけて下さい。」回答の方式は、「全くそう思わない」、「あまりそ
う思わない」、「どちらともいえない」、「ややそう思う」、「とてもそう思う」の5段階
で評定を求めた。集計にあたっては、順に、1点、2点、3点、4点、5点、と得点
化した。

4

結果と考察

1. 項目分析（平均値・標準偏差の算出）

まず、進学志望動機を問う21項目の平均値、標準偏差を算出した（表1）。

表1 記述統計量 (平均値と標準偏差)

	平均値	標準偏差 SD
資格をとるため	4.61	0.74
専門的な知識や技術を得るため	4.54	0.71
興味のある分野を深く掘り下げるため	4.17	0.89
自分にあった将来の職をさがすため	4.00	0.93
人生の視野を広げるため	3.87	0.94
就職に有利だから	3.83	0.97
幅広い教養を身につけるため	3.83	0.93
自分の才能をのばすため	3.57	1.01
得意とすることを追求するため	3.52	0.98
同じような目的を持った友人を得るため	3.36	1.06
知的好奇心を満たすため	3.20	1.02
青春をエンジョイするため	2.93	1.18
社会に通用する肩書きが必要だから	2.84	1.10
就職後、多くの収入・給与を得るため	2.83	1.06
高卒では職に就くのが難しいから	2.73	1.36
就職後、より高い役職につくため	2.69	1.11
高い社会的地位を得るため	2.56	1.08
自由な時間が欲しいため	2.36	1.01
漠然と進学だろうと考えてきたため	2.36	1.23
他にやりたいことがないので	1.96	1.07
特に自分の意思ではない	1.42	0.80

天井効果およびフロア効果の検討

平均値と標準偏差から、天井効果およびフロア効果のみられる項目についてチェックした。その結果、天井効果がみられたのは、「資格を取るため」「専門的な知識や技術を得るため」の2項目であり、資格取得のための専門的知識・技術の習得を目的とした積極的動機が強いことが明らかとなった。同一の質問項目を用いた八木ほか(2000)により抽出された5つの因子のうち、「専門・資格」因子を構成する項目は、「資格を取るため」「専門的な知識や技術を得るため」の2項目であったが、本結果で

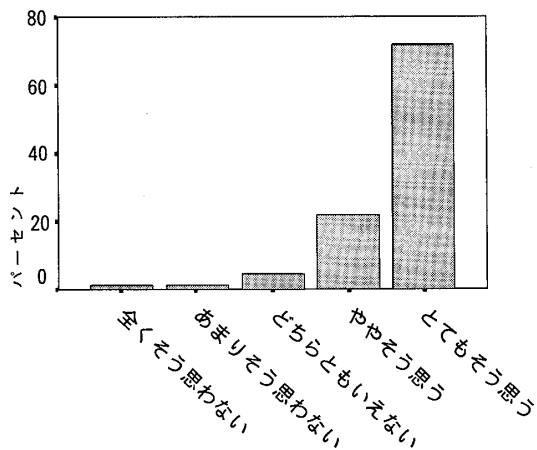


図1 「資格をとるため」

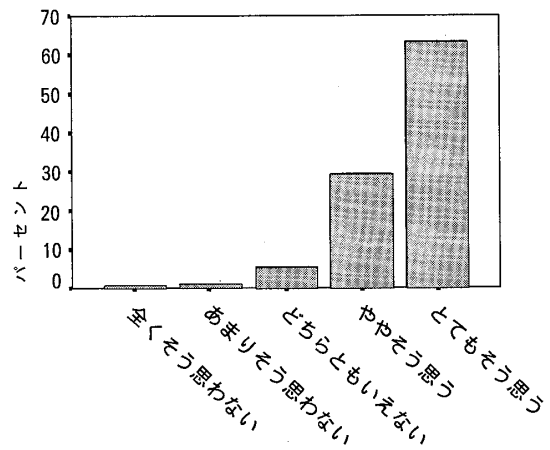


図2 「専門的な知識や技術を得るため」

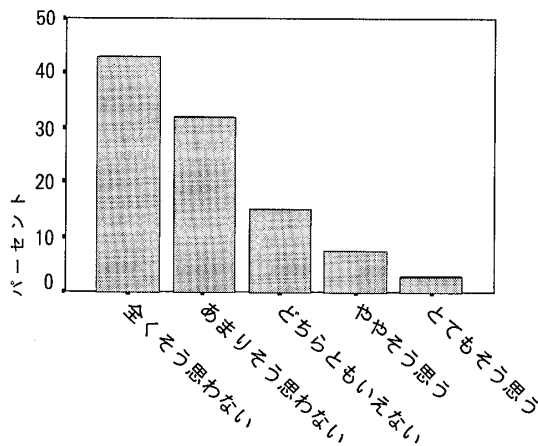


図3 「他にやりたいことがないので」

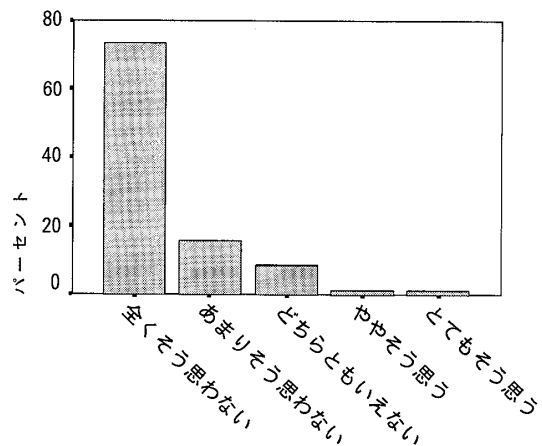


図4 「特に自分の意思ではない」

は、その2項目ともに天井効果がみられた。資格・専門分野志向の強さが際だった特徴であることが示されたといえよう。また、フロア効果について、「特に自分の意思ではない」「他にやりたいことがないので」の2項目が該当したことからも、進学機会に対する態度（動機）として、自らの意志による積極的な進路選択態度が認められたといえる。（表1、図1～4）

以降の因子分析においては、これらの4項目を除外して分析を行った。

2. 進学志望動機の構造

次に、21項目の質問のうち天井効果およびフロア効果がみられた4項目を除外した残りの17項目に対して、主因子法（Varimax回転）による因子分析を行った。

1) 因子分析結果

固有値1.0以上で4因子が抽出された。回転後の因子負荷量行列を表2に示す。

第1因子は、「社会に通用する肩書きが必要だから」「就職後、多くの収入・給与を得るため」「就職後、より高い役職につくため」「高い社会的地位を得るため」「就職に有利だから」「高卒では職に就くのが難しいから」の6項目が高い因子負荷量を示した。進学による社会的に認められる肩書の取得や地位への志向、卒業後の経済価値を得ることを目的とした動機と解釈できるため、「肩書・経済価値」因子と命名した。

第2因子は、「人生の視野を広げるため」「同じような目的を持った友人を得るため」「興味のある分野を深く掘り下げるため」「幅広い教養を身につけるため」「自分にあった将来の職をさがすため」「知的好奇心を満たすため」の6項目から構成されている。視野を広げ教養を高めること、興味関心のあった友人とともに学ぶことを目的とした志望動機と解釈できるため、高等教育機関の本来的機能を志向した動機として「教養」因子と命名した。

第3因子は、「自由な時間が欲しいため」「青春をエンジョイするため」「漠然と進

学だろうと考えてきたため」の3項目からなり、明確な目的をもたず、主として学生生活を自由に楽しむことや進学先のモラトリアム機能を志向する進学動機として「無目的・享楽」因子と命名した。

第4因子は、「自分の才能をのばすため」「得意とすることを追求するため」からなり、自己の資質や得意とする分野についての能力を伸長することを目的とした進学動機と解釈されるため、「資質能力伸長」因子と命名した。

これら4因子は、同一の質問項目を用いた八木ほか(2000)²²⁾の研究により見いだされた5つの因子「社会的地位」「得意分野」「無目的・漠然」「エンジョイ」「専門・資格」と比較すると、本結果の第1因子「肩書・経済価値」は、八木ほか(2000)により抽出された「社会的地位」を構成する5項目と一致している。本結果の第2因子「教養」と第4因子「資質能力伸長」については、八木ほか(2000)の「得意分野」にあたる。本結果の第3因子「無目的・享楽」は八木ほか(2000)の「無目的・漠然」および「エンジョイ」にあたる。なお、八木ほか(2000)の「専門・資格」は、「資格を取るため」「専門的な知識や技術を得るため」の2項目からなり、前述したとおり、本結果では2項目ともに天井効果がみられたために因子分析からは除外している。

2) 信頼性の検討

次に、各因子ごとの内的整合性について検討するため、信頼性係数(α 係数)を算出した。信頼性係数(α 係数)は、第1因子から順に、0.81、0.67、0.59、0.79であった(表2)。これら内的整合性のみられる第1～第4因子を下位尺度として扱い、各尺度得点を検討に用いる。なお、下位尺度得点の比較においては、各尺度により項目数が異なるため、各尺度の項目合計点を項目数で割った平均値を用いる(表2および図5)。

表2 進学志望動機の因子分析結果 (Varimax回転後の因子行列)

項目内容	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	共通性
社会に通用する肩書きが必要だから	.69	-.05	.15	.05	.50
就職後、多くの収入・給与を得るため	.67	.13	.17	.14	.52
就職後、より高い役職につくため	.64	.17	.35	.04	.56
高い社会的地位を得るため	.63	.15	.13	.11	.45
就職に有利だから	.52	.29	.04	-.08	.37
高卒では職に就くのが難しいから	.49	-.05	.42	-.04	.42
人生の視野を広げるため	.17	.59	.04	.24	.43
同じような目的を持った友人を得るため	.03	.56	.18	-.01	.34
興味のある分野を深く掘り下げるため	-.17	.49	-.08	.17	.30
幅広い教養を身につけるため	.14	.48	-.04	.18	.29
自分にあった将来の職をさがすため	.10	.37	-.03	.11	.16
知的好奇心を満たすため	.17	.36	.09	.21	.21
自由な時間が欲しいため	.23	.00	.63	.04	.45
青春をエンジョイするため	.15	.35	.59	.05	.50
漠然と進学だろうと考えてきたため	.36	-.22	.47	-.04	.40
自分の才能をのばすため	.11	.32	-.03	.83	.80
得意とすることを追求するため	.01	.33	.06	.66	.55
因子寄与率	15.19	11.37	8.16	7.91	42.63
信頼性	.81	.67	.59	.79	
下位尺度の得点平均値	2.91	3.74	2.55	3.54	

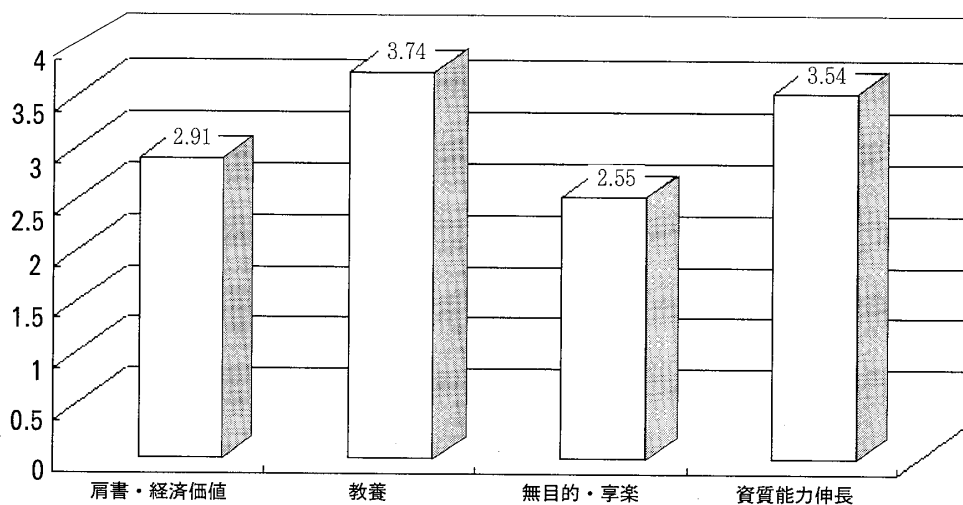


図5 下位尺度得点 平均値

3. 尺度得点の比較

第1～第4因子の各尺度得点の平均値(表2, 図5)を比較すると、得点の高い方から、「教養(平均 3.74)」、「資質能力伸長(平均 3.54)」、「肩書・経済価値(平均 2.91)」、「無目的・享楽(平均 2.55)」の順となっている。高等教育機関の本来的機能である「教養」や「資質能力伸長」への志向が高く、進学したことによる副次的機能としての「肩書・経済価値」や、「無目的・享楽」への志向が低いことから、健全な進学目的意識の明確さが認められたといえよう。

4. 進学志望動機の群差－保育専攻群と他専攻群の比較

次に、進学志望動機の各下位尺度について、保育専攻群と他専攻群に差がみられるかどうかを調べるために、それぞれの尺度得点の平均値（項目数で除した値）を算出した。（表3，図6）

表3 保育専攻群と他専攻群の尺度得点平均値

	[肩書・経済価値]	[教養]	[無目的・享楽]	[資質能力伸長]
保育専攻群	2.68	3.68	2.43	3.71
他専攻群	3.12	3.79	2.66	3.40

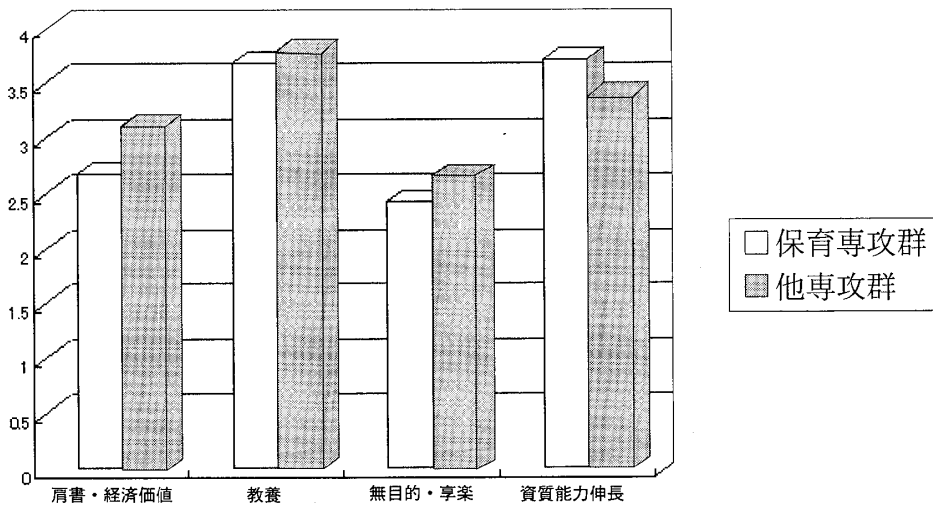


図6 保育専攻群と他先行群の比較

1) 保育専攻群と他専攻群の尺度得点の比較

各下位尺度得点について保育専攻群と他専攻群を比較するため、一元配置の分散分析を行った。

その結果、「肩書・経済価値」については、保育専攻群の平均値 16.05, SD 4.44と他専攻群の平均値 18.74, SD 4.77との間に0.1%水準で有意差がみられ [F(1,696)=59.03, $p < .001$]、保育専攻群の方が他専攻群よりも「肩書・経済価値」得点が高いことが示された。「教養」については、保育専攻群の平均値 22.06, SD 3.70と他専攻群の平均値 22.75, SD 3.36との間に1%水準で有意差がみられ [F(1,690)=6.63, $p < .01$]、保育専攻群は、他専攻群よりも「教養」得点が高い。「無目的・享楽」については、保育専攻群の平均値 7.31, SD 2.53と他専攻群の平均値 7.97, SD 2.52との間に0.1%水準で有意差がみられ [F(1,703)=11.86, $p < .001$]、保育専攻群の方が「無目的・享楽」得点が高い。「資質能力伸長」については、保育専攻群の平均値 7.41, SD 1.82と他専攻群の平均値 6.79, SD 1.74との間に0.1%水準で有意差がみられ [F(1,702)=21.15, $p < .001$]、保育専攻群の方が他専攻群よりも「資質能力伸長」得点が高い。

高い。

以上より、保育専攻群の進学志望動機に関して、自らの得意とする保育分野について自己の資質や能力をさらに伸長することを進学目的として明確にもち、高等教育機関の本来的機能である勉学により視野を広げ教養を身につけるといった志向や、卒業後の社会的な肩書や地位・収入を得ることへの志向は、他専攻群と比べると低いことが明らかとなった。保育専攻群はより特化された具体的な目的を積極的な進学動機としていることが示唆された。これらが、保育専攻群の進学志望動機の特徴といえようが、養成校の現状は、先述したように必ずしも教育課程に真摯に取り組んでいる学生ばかりではなく、授業や実習への取り組みに問題のみられる学生の漸増がいわれている。以下に、さらに保育専攻群のみについて詳細に検討する。

5. 保育専攻群のみの検討

各下位尺度について、保育専攻群のみ (N=341) の尺度得点平均値・標準偏差・最小値・最大値・中央値を表4に示す。

4つの尺度のうち、進学志望動機として望ましくない「無目的・享楽」の得点分布を示すグラフ(図7)と、「無目的・享楽」を構成する3項目「自由な時間が欲しいため」「青春をエンジョイするため」「漠然と進学だろうと考えてきたため」について、それぞれの度数分布(表5～7)を示す。

保育専攻群の「無目的・享楽」の得点平均値は7.31、SD 2.53、最小値3、最大値

表4 保育専攻群 (N=341) のみの尺度得点

	肩書・経済価値	教養	無目的・享楽	資質能力伸長
平均値	16.05	22.06	7.31	7.41
中央値	16	22	7	8
標準偏差SD	4.44	3.70	2.53	1.83
最小値	6	12	3	2
最大値	27	30	15	10

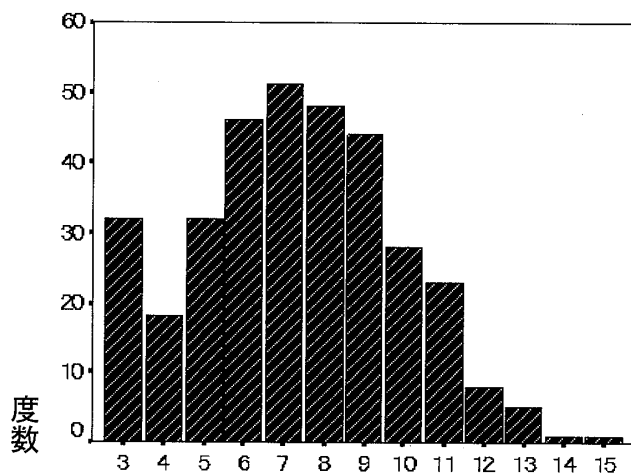


図7 「無目的・享楽」の度数分布

15、中央値7である(表4)が、構成する3項目のうち1項目以上に「ややそう思う」や「とてもそう思う」と回答された割合は、11.3%である。明確な進学目的をもたないまま、進学先で学生生活を楽しみたいと考えて保育者養成課程に入学してきている者が、全体の一割強在学していることが明らかとなった。また、「無目的・享楽」尺度を構成する3項目それぞれをみると、項目「自由な時間が欲しいため」に対して「ややそう思う」との回答が31名、「とてもそう思う」が7名であり計11.2%(表5)。項目「青春をエンジョイするため」については「ややそう思う」が81名、「とてもそう思う」が25名、計31.1%(表6)、項目「漠然と進学だろうと考えてきたため」は「ややそう思う」が42名、「とてもそう思う」が16名で、計17.0%の回答がみられた(表7)。以上のように、項目毎にみると、学生生活を楽しみたいといった意識が3割を越え、何となく進学するのが当たり前といった目的のない進学態度が2割近くみられること、進学目的として自由な時間を求めるものが1割を越えていることが示された。本研究の調査対象の在学する保育者養成機関は、ともに2年制の短期大学・専門学校であり、3,4年制の養成校と比べると、保育士資格や幼稚園教諭免許取得のためのカリキュラムは、授業時間割も実習スケジュールも厳しく、自由な時間を楽しむことを目的とした進学動機については、2年制の保育者養成カリキュラムの特徴を十分に理解し、それを踏まえた上での進路選択であるのか、今後の検討を要するところである。また、「無目的・享楽」志向の強さと勉学意欲(授業・実習態度)との関連についても検討の必要性が示唆された。

表5 度数分布「自由な時間が欲しいため」

	度数	パーセント
全くそう思わない	88	25.8
あまりそう思わない	110	32.3
どちらともいえない	102	29.9
ややそう思う	31	9.1
とてもそう思う	7	2.1
合計	338	99.1
システム欠損値	3	0.9
合計	341	100

表6 度数分布「青春をエンジョイするため」ため

	度数	パーセント
全くそう思わない	63	18.5
あまりそう思わない	70	20.5
どちらともいえない	99	29.0
ややそう思う	81	23.8
とてもそう思う	25	7.3
合計	338	99.1
システム欠損値	3	0.9
合計	341	100

表7 度数分布「漠然と進学だろうと考えてきたため」

	度数	パーセント
全くそう思わない	127	37.2
あまりそう思わない	84	24.6
どちらともいえない	68	19.9
ややそう思う	42	12.3
とてもそう思う	16	4.7
合計	337	98.8
システム欠損値	4	1.2
合計	341	100

総括的討論

1998年10月、大学審議会による答申「21世紀の大学像と今後の改革方策」²³⁾において、高等教育の現状、なかでも高等教育機関の「大衆化」による問題点が具体的に列

挙げられた。それから足かけ10年が経過し、21世紀を迎えた近年の高等教育における状況は、さらに深刻化しているというのが現場にある者の実感である。とくに、保育者養成校においては、保育者の資質能力・専門性の向上が社会的要請であるにもかかわらず、授業科目や学外実習への取り組みの不十分な学生の漸増が問題となっており、教育指導方法の再検討を含めた対策が急務となっている。本研究は、そうした諸問題への対応を探るための基礎的資料収集の一環として、進学志望動機に着目しその認知構造について検討することを試みた。

そのため、保育専攻学生341名を含む計712名を対象として、進学志望動機についての質問紙調査を実施し、まず、21の質問項目について項目分析した結果、天井効果およびフロア効果のみられた項目から、専門的知識や技術について学び資格を取得することへの積極的志向の強さが明らかとなった。次に、因子分析により、進学志望動機の構造として抽出された4因子「肩書・経済価値」「教養」「無目的・享楽」「資質能力伸長」について、各下位尺度得点の平均値を算出した結果、積極的動機の強さ、進学目的の明確さが認められた。M.トロウ (1976)²⁴⁾ の指摘による「(進学を)義務」ととらえるような態度(動機)や古市(1993)²⁵⁾ により指摘された「享楽志向」の広がりには認められず、資格取得のための専門的勉学に対する目的意識の明確さが顕著であることが分かった。本研究の調査対象はいずれも課程卒業時に資格・免許の取得が可能となるようなカリキュラムが組まれた学科に在学している学生であり、資格取得をめざした進学動機は自然であるが、社会的な肩書や高収入を期待するよりも、教養を高めたり能力を伸ばすことへの志向が強く、少なくとも進学時の目的意識(進学志望動機)が健全であることが伺われた。

さらに、保育専攻群の進学志望動機について他専攻群と比較検討した結果、有意差として、得意分野への志向の強さ、教養志向や肩書や地位・収入への志向や無目的に学生生活をエンジョイしたいといった志向は、他専攻群よりも低いことが示された。これらから、自己の得意な保育についての能力を伸ばすことに特化された目的をもった進学であることが伺われた。しかし、目的意識の希薄な進学態度も全体の1割強認められた。本研究の調査対象(保育専攻群)の在学する2年制養成校においては、保育士資格や幼稚園教諭免許を取得するためにはかなり厳しいカリキュラムをこなさなければならない。進学に対する目的意識(進学志望動機)の不明確な入学者が、各科目の授業や学外実習にどのような態度で取り組んでいるのか、今後、それらの関連について検討することも必要であることが示唆された。高等教育への進学率の上昇からますます大衆化の進行がみられるなか、本来、進学動機が明確であるはずの保育専攻学生の進学志望動機にも望ましくない進学目的がみられるのではないかという問題意識から、本研究では進学志望動機の認知構造を検討した。授業中の私語をはじめとする現状の様々な問題の背景として、たとえば、先行研究により報告されてきた「享楽志向」や「(進学を)義務」とみなすような無目的や同調・追随等の動機の広がり的问题があるのではないかと、明確な進学目的をもたずに入学してきたことが、授業や実

習への真剣な取り組みの欠如を生んでいるのではないかと考えて、進学志望動機に着目した。しかし、保育専攻群の進学志望動機についての本結果には、おおむねその認知構造の望ましさが認められた。このことから、次のようなことが示唆された。

本研究では、進学志望動機についての調査内容として、進路に対する志望動機の形成、進路の選択決定過程（下山,1983²⁶⁾,1984²⁷⁾;吉澤・山下,1993²⁸⁾;吉中,1994²⁹⁾）に関する項目が含まれていない。そのため、保育者の役割やその専門性を身につけるために必要な勉学について十分に理解し、自らの適性を鑑みての葛藤や模索を経た結果として形成・確立した進学動機であるのかどうかを明らかにすることはできていない。保育者養成教育のカリキュラムの特徴を踏まえた上での熟考なしの安易な進学動機が回答されている可能性もある。養成校における入学選抜の面接試験では、幼い頃からの保育者への憧れや、中学・高校時代の職業体験やボランティア活動で接した保育者への憧れが志望の動機として応えられることが多い。長谷部 (2006)³⁰⁾ の調査研究においても、保育者を志望する動機に関する質問項目についての因子分析の結果、第一因子として「憧れ」因子が抽出されている。憧れの気持ちから保育・幼児教育を志望するということは、進学動機として健全ではある。しかし、本結果に認められた進学志望動機の認知構造の望ましさも、進路の選択決定に至る過程での模索なしに、淡い憧れから、「将来、保育者になるためには資格が必要、そのためには専門的な勉強が必要」というステレオタイプの進学動機であるのかもしれない。実際、学生から「これほど忙しい・厳しいとは思わなかった」と、思い描いていたキャンパスライフとの違いに戸惑う感想がきかれることがある。また、保育現場での実習を経験した後、「(職業として) 長く続けていくのは大変そう・自信がない」等の理由から、卒業後の進路希望を保育職から一般企業への就職にあっさり変更する者もみられる。それらは、保育という営みが高度な専門性に裏付けられていること、養成校に進学後、多くの学習や実習経験を積むことの重要性やその厳しさ、保育者としての自らの資質能力等について真剣に考えるプロセスなしの進路選択が行われたことに起因するのかもしれない。今後、進学志望動機をより深く掘り取って検討するためには、調査項目の工夫が必要であり、インタビュー調査などの手法も用いて進路選択決定のプロセスもあわせた詳細なデータの分析をしていくことの必要性が示唆された。また、進学志望動機の構造と勉学意欲等に関する現状の様々な問題点との関連など、今後さまざまな角度から実証的に検討していくことによって、保育者養成教育のあり方を探るための基礎的資料を積み上げていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 笠原嘉『アパシー・シンドローム：高学歴社会の青年心理』岩波書店,1984.
- 2) 笠原嘉『退却神経症：無気力・無関心・無快樂の克服』講談社,1988.
- 3) 産経新聞社会部編『大学を問う：荒廃する現場からの報告』新潮社,1992, p.31-33.

- 4) 毎日新聞教育取材班編『大学に『明日』はあるか』毎日新聞社,1998, p.51-52.
- 5) 大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について：競争的環境の中で個性が輝く大学 別紙2 高等教育における現状の問題点』大学審議会答申1998年10月26日
- 6) マーティン・トロー 天野郁夫,喜多村和之訳『高学歴社会の大学：エリートからマスへ』東京大学出版会,1976, p.3-4.
- 7) マーティン・トロー 天野郁夫,喜多村和之訳 前掲書6) p.63-64.
- 8) 下山晴彦「高校生の人格発達と進路決定：テストバッテリーを用いての縦断的事例研究」『東京大学教育学部紀要』Vol.22,1982, p.211-222.
- 9) 下山晴彦「高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究」『教育心理学研究』Vol.31(2), 1983, p.56-61.
- 10) 下山晴彦「ある高校生の進路決定過程の縦断的研究」『教育心理学研究』Vol.32(3), 1984, p.43-49.
- 11) 淵上克義「進学志望の意志決定過程に関する研究」『教育心理学研究』Vol.32(1), 1984, p.59-63.
- 12) 宮本邦雄「女子大学生の進学志望動機に関する研究」『東海女子大学紀要』Vol.11, 1991, p.251-257.
- 13) 古市裕一「大学生の大学進学動機と価値意識」『進路指導研究』Vol.14, 1993, p.1-7.
- 14) 斎藤浩一「大学志望動機の高専学校間格差に関する実証的研究」『進路指導研究』Vol.17(1), 1996, p.28-36.
- 15) 八木晶子〔ほか〕「高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析」『進路指導研究』Vol.20(1), 2000, p.1-7.
- 16) 大学審議会 前掲書5)
- 17) 古市裕一 前掲論文13) p.1-7.
- 18) 淵上克義 前掲論文11) p.59-63.
- 19) 八木晶子〔ほか〕前掲論文15) p.1-7.
- 20) 長谷部比呂美「保育者養成課程に学ぶ学生の能力自己評価と保育者志望の動機」『お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要』Vol.2,2004, p.129-137.
- 21) 長谷部比呂美「保育者をめざす学生の志望の動機と資質能力の自己評価」『淑徳短期大学研究紀要』Vol.45,2006, p.115-130.
- 22) 八木晶子〔ほか〕前掲論文15) p.1-7.
- 23) 八木晶子〔ほか〕前掲論文15) p.1-7.
- 24) 大学審議会 前掲書5)
- 25) マーティン・トロー 天野郁夫,喜多村和之訳 前掲書6)
- 26) 古市裕一 前掲論文13) p.1-7.
- 27) 下山晴彦 前掲論文9) p.56-61.
- 28) 下山晴彦 前掲論文10) p.43-19.
- 29) 古澤照幸,山下利之「女子高校生の進路志望動機と進路決定」『社会心理学研究』Vol.8(2),1993, p.98-106.
- 30) 吉中淳「高校生の進路選択における計画性を規定する要因の分析的研究：四年制大学進学希望者を対象に」『進路指導研究』Vol.15,1994, p.20-29.

31) 長谷部比呂美 前掲論文21) p.129-137.

注

- 1) 2006年度学校基本調査速報 (文部科学省 2006 文部科学統計要覧 平成18年度版)
- 2) 過年度高卒者等を含む。